

前三五〇年代、トラキアのオドリユサイ王国をめぐる政治・軍事情勢

——東王国の王ケルソブレプレテスの動向を中心に——

小 河 浩

【要約】 前三六〇／五九年にエーゲ海北岸以北の大勢力であったトラキア系オドリユサイ王国は、コテュス王の死を受けてペリサデス、アマドコス、ケルソブレプレテスを王とする三つの王国に分裂する。このうち最も東側の王国を支配したのはコテュスの子ケルソブレプレテスであった。彼はとりわけ前三五〇年代に毀誉褒貶の激しい信頼のおけないバルバロイとしてギリシア系史料に記される。そのため、諸研究者たちは彼を、マケドニアのピリッポス二世とアテナイとの狭間にあって、オドリユサイ王国再統一を目論んだ好戦的かつ未開の王として評価してきた。具体的には、ケルソブレプレテスはアテナイからケルソネソス半島を奪取しようとし、一方で他のオドリユサイ諸王や周辺諸勢力を攻めるなど、攻撃的な政策を展開した、と考えられてきた。しかしながら、諸史料を再検討した結果、前三五〇年代に彼がオドリユサイ王国再統一を試みたことはなかったことを明らかにした。

史林 一〇二巻二号 二〇一九年三月

はじめに

主に今日のブルガリアからルーマニアにかけて、古代にはインド・ヨーロッパ系のトラキア人と呼ばれる人々が住んでいた。中でも南東バルカンを中心にトラキア系のオドリユサイ人は、前五世紀後期から前四世紀半ばにかけて大勢力を築いていた。前三六〇年代からオドリユサイ王国の王コテュス一世（以下、コテュス）は、ケルソネソス半島などエーゲ海北

部の拠点をめぐり、アテナイと戦争状態に突入した。ケルソネソスはエーゲ海から黒海へと通じるヘレスポントスのエーゲ海側入口を押さえる交通の要衝である。古代においてはアテナイへの黒海方面からの糧道にあたっていたので、アテナイは度々ケルソネソスの領有を欲した。ケルソネソスは元来トラキア系住民の原住地でもあり、オドリュサイ王国にとっても確保したい土地であった。オドリュサイ人はペルシア戦争後から強大な勢力を築き、ペロポネソス戦争頃にはトラキア屈指の大勢力となっていた^①。前四世紀に入るとオドリュサイ王国は内戦で分裂したが、前三八〇年代にはコテュスのもとでアテナイの支援を受けて統一を取り戻す。その後二〇年近くコテュスはアテナイとの友好関係を維持していたが、前三六〇年代末にはケルソネソスなどをめぐってアテナイと戦う。途中でコテュスは暗殺されるが、息子のケルソブレプテスが後を継ぐと、その直後に王国の中部にアマドコス、西部にベリサデスという王が現れ、王国を三つに割って東部分の王ケルソブレプテスと争う。ようやく前三五七年にアテナイとオドリュサイ王国は和平を結び、アテナイはケルソネソスに一定の権益を確保したのである。ギリシア系史料では、ケルソブレプテスは和平を無視してしばしば武力でのオドリュサイ王国再統一をうかがうなど、油断のならないバルバロイとして描写される。

こうしたケルソブレプテスの好戦的かつ場当たり的態度が再考の対象とされてこなかったのは、トラキア人全般を野蛮かつ好戦的バルバロイとして伝えるギリシア系史料の叙述が研究者に少なからず影響を与えてきたせいであった^②。それに対してトラキア人は自ら文字史料を残さなかったので、古代トラキア世界は、ギリシア世界と交流の少ない未開の閉ざされた世界と認識されてきた^③。加えて米ソ冷戦時代、古代トラキア領域の多くはブルガリアなどの旧共産圏に含まれたので、西側研究者の立ち入りも困難であった。そのため古代トラキア研究が大きく進展することはなかった。しかし、冷戦構造崩壊後の目覚ましい考古学的成果の進展に伴い、トラキア世界にはギリシア世界との密接な交流が存在していたことが明らかとなりつつある。加えて、ギリシア史の中でもアテナイ研究は従来の成果の蓄積により、研究の余地が少なくなりつつある。一方でこれまで等閑視されてきたギリシア周縁部世界の研究が進展し、そこからアテナイを改めてとらえ直そう

とする試みが現れている^④。現在の古代トラキア史研究の進展は、そうした近年の研究動向の一環を形成している。

トラキア世界とギリシア世界との交流や相互依存関係を明らかにしていくことは、エーゲ海北岸世界の理解を深めるため、またはアテナイ人など大勢力のエーゲ海北岸をめぐる政治・軍事活動を明らかにするためにも、重要な課題である。

とは言え、ギリシアに比べて相対的に史料の少ないトラキア世界を包括的に研究することはできない。現状のトラキア史研究ではテーマが細分化された研究が多数存在するが、これもやむをえない次第である。現在の研究では、トラキア世界は同質ではないことが明らかとされており、①南西トラキア（エーゲ海北岸のアンピポリス周辺）、②南東トラキア（エーゲ海北岸マロネアあたりから、ヘレスポントス海峡をへて黒海西岸のビュザンティオン＝現在のイスタンブールあたりまで）、③北方のゲタイ人（ドナウ川周辺に住む諸族）、④その他（ブルガリア内陸の諸族など）、というように研究が細分化される傾向にある^⑤。

そこで本稿は、前三五〇年代のオドリュサイ王ケルソブレプテスの動向を対象として、当時のエーゲ海北岸世界をめぐる考察を行いたい。古典期に屈指の大勢力を築いたオドリュサイ王国は、エーゲ海北岸から黒海西岸までを版図としており、ギリシア諸勢力と接してきた。トラキアとギリシアとの関係を考える上で重要な存在であり、南東トラキア史研究の中核的存在と言える。同王国末期の王ケルソブレプテスに注目するのは、アテナイや他のギリシア諸ポリスとの関係に加えて、オドリュサイ王国の内情がある程度うかがえる程の史料に恵まれているからである。古代トラキアには多くの王や部族が存在したが、一度に全体像を明らかにすることは出来ない。ケルソブレプテス時代のオドリュサイ王国について理解を深めることは、今後のトラキア史研究の過程において、他の諸族を研究するうえで比較対象として役立つはずである。以上の理由で、本稿では前三五〇年代のケルソブレプテスとアテナイとの関係を考察することで、末期オドリュサイ王国の実態と、エーゲ海北岸の政治・軍事情勢を明らかにしたい。

① Diod. XII 50, 1-7. テレスの子シタルケス（前四四四年頃〜前四二四年）が王の時に全盛期であり、騎兵五〇〇〇騎と歩兵二二〇〇〇人を持ち、年収一〇〇〇タランテムを得ていた。

② 例えば以下の史料があげられる。Hdt. VI 36; Thuc. II 96, 2, 98, 4, VII 29-30; Plut. Alc. 36; Androt. fr. 36; Diod. XVI 71, 1-2; Strabo, VII 5. A. H. M. Jones, *The Greek City from Alexander to Justinian* (Oxford, 1940), p. 27 は「トラキア人が常に近隣諸ポリスと対立したとする。トラキア人をサテュロロスや酒神ディオニュソスと結びつけて蔑視するギリシア人のイメージにこころづいては、'M. A. Sears, "Athens," in J. Valeva, E. Nankov & D. Graninger (eds.), *A Companion to Ancient Thrace* (Oxford, 2015), p. 315 を参照」。

③ 「トラキアとギリシア間の交流が少なかつたとする説にこころづいては、M. Tacheva, "On the Thracian Royal Economy (5th-4th c. BC) after the So-called Inscription from Pistiros," in K. Rabadjiev & R. Gicheva (eds.), *Studies in Honor of Professor Ivan Marazov* (Sofia, 2002), pp. 264-277 を参照。特にアテナイの政治・社会・文化史研究はアッティカの内部にのみ焦点があてられる傾向にあった。そのため、様々な研

究でトラキアとギリシアはしばしば対立的に捉えられた。この点に関しては K. Vlassopoulos, "Review of: Sears, Matthew, A., *Athens, Thrace and the Shaping of Athenian Leadership*," *Bryn Mawr Classical Review* 2013. 09. 15 (<http://bmcr.brynmawr.edu/2013/2013-09-51.html>, 最終閲覧日二〇一八年五月二〇日)。しかし、大量の考古学的証拠の発見にこころづいて、限定的に終止したとされるトラキアとギリシア間の交流に関する見方は覆された。この点については C. Tzochew, "Trade," in J. Valeva, E. Nankov & D. Graninger, *op. cit.*, p. 413 を参照」。

④ 古典期アテナイの文化にペルシア文化が与えた影響に関しては、M. C. Miller, *Athens and Persia in the Fifth Century BC: A Study in Cultural Receptivity* (Cambridge, 1997) を参照。アテナイの指導者たちとペルシアとの活動経歴が重要であったという議論については M. A. Sears, *Athens, Thrace, and the Shaping of Athenian Leadership* (Cambridge & New York, 2013), pp. 46-139 を参照。

⑤ P. Balabanov, "Power and Property Rights in Ancient Thrace - 6th-4th Centuries BC," *Thracia* XXI (2016), pp. 94-95.

第一章 先行研究と問題の所在

一 末期オドリュサイ王国に関する史料の存在状況

ケルソブレプレテスの末期オドリュサイ王国について多くを伝えるのはデモステネス第二三番弁論「アリストクラテス弾劾」である（以下、デモステネス二三番）。しかしながら、デモステネス二三番は政治弁論であるために、そのまま信用することが困難である。また、デモステネス二三番は当時のアテナイにおける政治情勢が反映されている可能性もあるので、



図：前四世紀のオドリュサイ王国

※点線はオドリュサイ王国の推定最大版図（『デモステネス弁論集 四』木曾明子・杉山晃太郎訳（京都大学学術出版会、二〇〇三年）、4図・黒海およびその周辺をもとに作成）

そのような背景も考慮に入れなくてはならない。デモステネス二三番は一般に前三五二年晩夏の作とされる。^①当時ケルソブレプテスは、アテナイに対して自己の縁者であり、アテナイ市民権を持つオレオス出身の傭兵隊長カリデモスをアテナイの将軍に選出するように要請した。アテナイでは、アリストクラテスなる人物がカリデモスに不可侵特権を付与する法案を提出した。法案は民会に先立つ政務審議会を通過したが、何らかの理由で期限切れのまま民会には提出されなかったようである。後にアテナイ人エウテュクレスが違法提案として告発し、デモステネス二三番が作成された。アリストクラテス側の反対弁論は伝わっておらず、裁判の結果は不明である。その中でケルソブレプテスはコテュスと共に気まぐれで、貪欲かつ好戦的なバルバロイとして叙述される。デモステネス二三番はこれまで様々な角度から調査され、時系列を混乱させたり、カリデモスの功績を無視する、アテナイ人の自尊心を煽り立てるなど、様々な修辭上の技法を駆使することが指摘されており、やはり単純に信じることは困難である。そこで本稿では、デモステネス二三

番に加えて他の文献史料や一部の考古学資料も含めて総合的に考察することで、当時のオドリユサイ王国とそれを取り巻くエーゲ海北岸の政治・軍事情勢を明らかにしていきたい。

二 研究 史

本稿は、主に前三五〇年代における状況に焦点をしばって考察を行う。この時期はケルソブレプテスが集中的に日和見的行動と領土的野心を見せた時期とされており、その意味で従来の学説を見直せる好素材と位置づけられる。従来の研究では、ケルソブレプテスはマケドニア王ピリッポス二世（以下、ピリッポス）とアテナイとの間で去就を度々変更しながら、自己の領土的野心を満たそうとした人物である、という評価が定着していた。グリフィスは、彼がピリッポスと密約を結んでいたという。当時ピリッポスを敵としたアテナイにしてみれば、ケルソブレプテスは裏切り者になる。バックラーやベックも、ケルソブレプテスはピリッポスと共同でアマドコスの領土を分割しようと目論んだという^⑥。また、バックラーは後年の著書でも、ケルソブレプテスは長年二律背反の危険な政策を行い、孤立して他者から信用されていなかったとしている^⑦。前三五七年にアテナイの將軍カレスはケルソブレプテス以下三人のオドリユサイ諸王とアテナイとの四者間の和平を実現させた。これがいわゆる「カレスの平和」である。しかし、これ以降も彼がピリッポスとアテナイの間で度々陣営を変えた、とする指摘をコークウェル、ボルザ、ウォーティントン、澤田などが行っている^⑧。アーチバルド、アシユレイ、デレフなども、ケルソブレプテスはすぐに「カレスの平和」を破棄してケルソネソスを狙った、などとしている^⑨。

これに対して、ケルソブレプテスが一貫してアテナイとの友好関係を保ったと主張する研究者が少ないながら存在する。シーリーは、前三五七年から前三五二／一年まで、アテナイとケルソブレプテス間に緊張はなかったとしているが、デモステネスの活動を中心に見据えた研究のため、オドリユサイ王国に関する詳細な議論は行っていない。また、ケルソブレプテスが中王国の王アマドコスやヘレスポントスのポリスであるビュザンティオン、マルマラ海に面するペリントスなど

と戦ったとするが、この戦争の性格については述べられていない。^⑩ 他方、ボボフやボロザノフらは、ケルソブレプレテスはアテナイとの友好関係を維持していたとしながらも、彼はアテナイの傘下でオドリュサイ王国再統一を目論んだ、としている。^⑪

三 問題の所在

このように、先行研究ではケルソブレプレテスは自己よりも強大な勢力と結んで好戦的な政策を取り続け、領土的野心を満たそうとした人物であったと考えられてきた。即ち、①ケルソネソスをアテナイから奪回することを狙ったこと、②①とも関連するが、他のオドリュサイ諸王を攻撃して王国再統一を狙ったこと、の二点が指摘されている。しかしながら、ケルソブレプレテスに対する見方は、トラキア人一般に関する好戦性・野蛮な種族・不誠実などのギリシア系史料の偏見をそのまま引き継いだものではないであろうか。彼に関する諸史料の中身は錯綜したものであり、未だ十分な解明を見ていない。また、一九七〇年代以降を中心に、前四世紀後半のピリッポスに関心が集まった時には、ケルソブレプレテスはピリッポスを中心とした史観の中で、正当に評価される機会を与えられてこなかった。そこで本稿は、ケルソブレプレテスが前三五〇年代に周辺諸勢力を攻撃して、王国再統一を試みていたのかどうかを明らかにするものである。

以下第二章では、前三五七年の「カレスの平和」の中身と、ケルソネソスの重要性について検討し、当時ケルソブレプレテスが「カレスの平和」に伴う和平を破ってケルソネソスを奪取するつもりであったのかどうかを検討する。第三章では、「カレスの平和」直後にケルソブレプレテスがアマドコスら他のオドリュサイ諸王を攻めたのかどうかを、明らかにする。

また、前三五〇年代末にケルソブレプレテスはアマドコスら周辺諸勢力を攻めて、王国再統一を試みたのかどうかを考える。即ち、ケルソブレプレテスはアテナイとの和平を無視する形でアマドコスを攻めたのか、あるいはアテナイと同盟する形でアマドコスを攻めたのか、それとも攻めなかったのか、を考察したい。これによってケルソブレプレテスが常に好戦的で無

謀な人物であったかどうかが明らかになるであろう。かかる研究は近年、著しい成果をあげているトラキアの考古学研究を補完することにもつながる。ひいては、こうした研究の積み重ねがエーゲ海北岸を中心とするトラキアとギリシアとの相互依存関係のネットワークの解明につながることを期待される。

- ① Dionysios, *Letter to Ammaios*, I, 4, 725. 『デモステネス弁論集 四』木曾明子・杉山晃太郎訳（京都大学学術出版会、二〇〇三年）、三二六、三二七頁・註（一）。フォックスは「デモステネス二三番は前三五六年に作成され、その後前三五三年頃に裁判のために内容が更新されたもの」という。Dem., XXIII 10-11. 前三五七年のカレスの平和直後に成立したものと認められる文言はあるが、Dem., XXIII 103. には前三五三年頃とされるケルソネッスへのアテナイの軍事権民であるクレルコイ派遣や、Dem., XXIII 124. に前三五三年夏以降にボキスの全権將軍となったパウロスへの言及が見られる。R. L. Fox "Demosthenes, Dionysius and Dating of Six Early Speeches," *Classica et Mediaevalia* 48 (1997), pp. 183-187.
- ② Dem., III 4-5. 前三五二一年にカリテモスがアテナイ側の軍事指揮官として活動しているのが、彼はアテナイから一定の信任を得てゐることになる。
- ③ コテヌスにひらひら、Dem., XXIII 114, 119. ケルソプレブテスにひらひら、Dem., XXIII, 135, 137.
- ④ L. Pearson, *The Art of Demosthenes* (Meisenheim am Glan 1981), pp. 68-74; T. L. Papillon, *Rhetorical Studies in the Aristocrata of Demosthenes* (New York, 1988), pp. 91-104; M. Golden, "Demosthenes and the Social Historian," in I. Worthington (ed.), *Demosthenes: Statesman and Orator* (Routledge, 2000), pp. 163-166; D. M. MacDowell, *Demosthenes: The Orator* (Oxford, 2008), pp. 203-204.
- 206; Archibald, *op. cit.*, pp. 220-221; 木曾・杉山「前掲書」三三九-三四五頁.
- ⑤ N. G. L. Hammond & G. T. Griffith, *A History of Macedonia Vol. II* (Oxford, 1978), p. 248.
- ⑥ J. Buckler, *Philip II and the Sacred War* (Leiden, 1989), pp. 52-53; J. Buckler & H. Beck (eds.), *Central Greece and the Politics of Power in the Fourth Century BC* (Cambridge, 2008), pp. 227, 229.
- ⑦ J. Buckler, *Aegean Greece in the Fourth Century BC* (Leiden, 2003), pp. 431-432.
- ⑧ G. Cawkwell, *Philip of Macedon* (London, 1978), p. 76; E. N. Borza, *In the Shadow of Olympus: The Emergence of Macedon* (Princeton, 1990), pp. 212, 214-215; I. Worthington, *Philip II of Macedonia* (New Haven & London, 2008), pp. 59-60, 68; 鹿田典子「フーリス二三世のギリシア政策——「フーロクラテスの和約」をめぐって——」『史学雑誌』一〇一・七（一九九三年）三八頁・註（四三）.
- ⑨ E. M. Harris, *Aschines and Athenian Politics* (Oxford, 1985), pp. 45, 76; Z. H. Archibald, *The Odrasian Kingdom of Thrace* (Oxford, 1998), pp. 231-232; J. R. Ashley, *The Macedonian Empire: The Era of Warfare under Philip II and Alexander the Great, 359-323 B. C.* (Jefferson, North Carolina & London, 1998), p. 138; C. Velgami-Terzi, *Oi Ellendes politis kai to basileio tôn Odrusôn apô Abderôn póleos métri Ísrou potamou* (Thessaloniki, 2004), p. 298; P. Delev,

- "Thrace from the Assassination of Kotys I to Koroupedion (360-281 BCE)." in Valeva, Nankov & Graninger, *op. cit.*, p. 49.
- ⑩ R. Sealey, *Demosthenes and His Time* (Oxford, 1993), pp. 123-124.
- ⑪ K. Porozhanov, "The Odrysian Kingdom, the Poies along Its Coasts and Athens from the End of 6th Century until 341 BC," *Studia Thracica 14* (Blagoevgrad, 2011), pp. 278-279, 727; id., "La Chersonese de Thrace et l'Hellespont dans le royaume Odryse de Kersebleptes (359-341 Av. J.-C.)," in M. H. Sayer (ed.), *Eleventh International Congress of Thracology, Istanbul, 8th - 12th November*,

2010 (Istanbul, 2013), p. 5. B. Φοῦ, A. Πονοῦ & K. Νόρσανος (eds.), *Lapene na imnikume. The Thracian Kings* (Sofia, 2014) pp. 227-228によれば、ケルソブレプテスは、前三五三年にアテナイにケルソネソスを譲渡した。それと引き換えにアマドコスに対するアテナイの保護を打ち切らせてからアマドコスを攻めた。デルボイ出土の「碑文はケルソブレプテスの四人の子を称賛しており、フォルはここから彼の反マケドニア的行動がうかがえるとするが、この見解についてそれ以上に詳細な説明はなされていない。

第二章 ケルソブレプテスはケルソネソスを狙ったのか？

デモステネスの記述によると、前三五四年頃にケルソブレプテスはピリッポスらと密約を交わし、ケルソネソスの奪取を企んだ、とされている。^①当時、ギリシア中部ではデルボイ神殿を占拠したボキスが、テバイやテッサリア諸ボリスなどと神聖戦争を展開していた。前三五四年頃、ボキスの全権將軍ピロメロスが敗死したので、一時的に休戦状態が訪れる。^②同じころ、ピリッポスはマケドニア沿岸のメトネを攻略するなど、勢力圏を拡大させつつあった。^③一方、小アジアではペルシア貴族のアルタバゾスがペルシア王に対して反乱を起こしていた。アテナイは自己の海上同盟から離反したキオス、コス、ロドス、ビュザンティオンらとの間で同盟市戦争（前三五八年～前三五五年）を展開していたが、この同盟市戦争に従軍していたアテナイの將軍カレスを援軍として呼び込んだ。^④ペルシア王の怒りを持ったアテナイがカレスを引き上げると、アルタバゾスはテバイを頼ったので、テバイは將軍パンメネスと五〇〇〇人の軍を派遣した。ケルソブレプテスがケルソネソスの奪取を企んだのは、この時のことであるという。この時カレスがパンメネスと共に現れたピリッポスをエーゲ海北岸のネアポリス近郊で追撃したという史料が残っているので、^⑤カレスが同盟市戦争から引きあげることがわか

る。従って、この事態は同盟市戦争終了から間もない時期のことである。

本章では、ケルソネソスの重要性和共にカレスの平和の内容を検討して、ケルソブレプテスのいかなる行為が和平協定違反となるのかを明らかにする。次に、ケルソブレプテスがピリッポスらと共謀して、ケルソネソスを狙ったのが本当かどうか、を明らかにしたい。

一 「カレスの平和」とケルソネソス

コテュスの死後、ケルソブレプテスに対してアマドコスとベリサデスが分立すると、彼らはアテナイと互いに友好関係を結ぶべく争った。前三五七年にアテナイの將軍カレスはオドリュサイ王国へ進み、「カレスの平和」を実現する。この条約はいかなる枠組みであったのか。この内容については、当時の碑文からうかがえる。一部が欠損している碑文だが、それによるとトラキア沿岸部諸ポリスは三人のオドリュサイ諸王ベリサデス、アマドコス、ケルセブレプテスに「父祖伝来の貢納 (*patros phoros*)」と共に、アテナイにも分担金 (*ouvraēg*) を納める。もし、諸ポリスがアテナイへの分担金を滞らせた場合には、三人の諸王がこれを厳しく取り立てる。逆にこれら諸王への諸ポリスの貢納支払いが滞った場合には、アテナイ人とその將軍たちが取り立てを行うことになっている。沿岸部諸ポリスは自治独立であり、三人の諸王に対して(和平協定に従うように) 誓いをすべきこと、一方でアテナイとは同盟者であることが、定められている。^⑥

また、この協定成立の少し前、アマドコスの縁者にしてアテナイ人傭兵隊長のアテノドロスの提案では、ケルソブレプテスはアテナイと他の諸王に対して誓いを行い、王権を三人の王で分割して所有し、さらにこの三人の王はケルソネソスをアテナイへ返還すべきこと、とある。^⑦ これらの事から、三人の王は王権を分割して互いに争わないこと、アテナイとは同盟関係にあること、貢納の取り立てにあたっては互いに協力することなどが期待されていたことになる。従って、ケルソブレプテスがケルソネソスの奪取を試みたり、アテナイに無断で他の諸王を攻めるなどの行為を働けば、それは和平協

定違反ということになる。

ケルソネソスには元来トラキア系住民が住んでいたが、後にアテナイ人が植民者として割り込む形で定住した。アテナイは穀物を自給できなかったため、その多くを黒海方面からの輸入に依存していた。そのため、アテナイにとってケルソネソスはどうしても確保しておきたい要地であった。^⑨ 前三六九年にアテナイ人はケルソネソスを自己の所領として、ペルシア王や他のギリシア人に承認させている。^⑩

オドリュサイ王国は近隣のギリシア人から貢納を取っていたことが知られるが、近年の考古学資料から、王国にはギリシア人が交易のために入り込んでいたことが明らかとなっている。^⑪ 一九九〇年にブルガリア西部ほぼ中央内陸のベトレン村近郊から出土したいわゆるピステイロス碑文には、コテュスの法令を引き継ぐ形で、エーゲ海北岸のマロネアとピステイロス、所在地未詳のプラセノイのベラナ、名称不明の商業地（エンポリア）間を輸送される商品へ賦課金を課さないこと、ピステイロスに住むマロネア人、タソス人、アポリニア人を保護すること、などが刻まれている。^⑫ 同碑文に関しては多くの議論があるが、^⑬ ここでは立ち入らない。ピステイロス碑文からは、オドリュサイ王国内部でギリシア人が交易などに従事していたことが明らかである。ポロザノフは、考古学的調査によって発見されたピステイロス以外にブルガリアほぼ中央内陸部のヒサリヤ自治体のクラステヴィチ村近郊遺跡、ブルガリア西部のパザルジク地方、ブルガリアの黒海沿岸部ほぼ中央のブルガスにおける遺跡など、二〇ヶ所に商業地遺跡が確認される、としている。^⑭

今日のブルガリア内陸部にある古代のヘブロス川（現代のマリッツァ川）中流域から、多数のギリシア系アンフォラが出土している。アーケイック期にはエーゲ海北部で小アジア沿岸近くのレスボス島のアンフォラが独占的地位を占めていたが、それは後に小アジア南西部沿岸のミレトスに取って代わられる。古典期に入ると、小アジア西部対岸のキオス島・エーゲ海北岸のタソス島やメンデ、そして黒海南岸のヘラクレイア・ポンティカなどのアンフォラが主流を占めてくる。^⑮ アンフォラについての数量的分析はなされていないが、これはおそらく多くのアンフォラが破損した状態で出土したり、

あるいは破片として見つかるため、正確な数量把握が困難なためであろう。それでも前四世紀の第三・四半期までにこれらアンフォラの輸入は、組織的に行われていた、と考えられている。^⑮ 今日までの発掘調査からも、オドリユサイ王国と主にエーゲ海北部のギリシア人との間には、活発な交易活動が存在したことがうかがえる。それと共に、ブルガリアからは各地で大量のギリシア諸ポリスの貨幣が見つかる。出土貨幣から王国に貨幣経済が従来考えられていた以上に浸透していたことが、わかってきた。^⑰ 貨幣の多くはタソス島、エーゲ海北岸のマロネイア、小アジア北岸にあつてマルマラ海に面したキュジコス、同じく小アジア北岸にあつてヘレスポントスに面したバリオンなど王国と地理的に近く、密接な関係を持つ諸ポリスのものであった。^⑱ また、それらと並んでケルソネソスの貨幣もよく出土しており、とりわけトラキア南部のヘブロス川と支流のトンゾス川の上中流域から、ケルソネソスの貨幣は見つかる傾向にある。^⑲

タソスの貨幣は模造貨幣も含めて特に数が多く、その他の貨幣を圧倒してトラキア内部で循環していた形跡がある。^⑳ 一方でオドリユサイ諸王は王国内の人々や、沿岸部ギリシア人、商業地などから貢納を得ていたことが知られている。^㉑ オドリユサイ諸王独自の貨幣はギリシア系貨幣に比較して少く、流通しておらず、そのため少なくとも王国の貨幣経済はギリシア系貨幣を必要としており、長期の戦乱はケルソブレプテスにとつても損失ではない。確かにケルソブレプテスがケルソネソス全体を掌握すれば、彼の収益も増加する。それにはアテナイから同地をほぼ無傷で奪うしかないが、そうした状況はほぼ期待しえない。彼は本当にケルソネソスの奪取を試みたのであろうか。

二 ピリッポス、パンメネスの進軍とケルソブレプテス

前三五四年頃にマロネイアへピリッポスとパンメネスが現れ、ケルソブレプテスが両者に対して何らかの誓約を行った。この時、「この土地の支配者アマドコスがピリッポスの侵入を阻止しなかったら、我々がカルデア人およびケルソブレプテスと対戦することを何者も妨げるものはない」と、デモステネスは主張している。^㉒ この時パンメネスは小アジア

北西部を支配するアルタバゾスのもとへ向かう途中であったと考えられているが、彼は陸路オドリュサイ王国を通過したことになる。カルデアはケルソネソス半島の付け根にある最大のポリスで、アテナイに対しては非常に反抗的な姿勢を見せるポリスであった。²⁴⁾

グリフィス、アーチバルド、デレフなどは、この時ケルソブレプテスは彼らと共同して、アテナイからケルソネソスの奪取を試みた、とする。その中でもデレフは、ケルソネソス奪取の陰謀が失敗に終わったことにより、ケルソブレプテスは直ぐにピリッポスからアテナイ陣営へ鞍替えした、としている。²⁵⁾これに対して疑問を投げかけるのはベイディアンである。彼が注目するのはテオポンポスである。テオポンポスは、前三五三年頃と考えられるアマドコスとケルソブレプテスとの戦争を書き記している。それには、「アマドコス―彼らのうち二人、父と子がいた。息子はピリッポスへ、ケルソブレプテスとの戦争の時に同盟者となるために行った」、とある。²⁶⁾ベイディアンによると、アマドコスはピリッポスとパネメネスの来寇からほどなく、ケルソブレプテスと戦争をする中でピリッポスの同盟者へと転じているとする。²⁷⁾またベイディアンは、ケルソブレプテスの子らがピリッポスと敵対したボキスの支配下にあるデルポイで称賛された碑文があることから、ケルソブレプテスはこの時ピリッポスの同盟者にはならなかった、という。²⁸⁾

ポリュアイノスでは、ピリッポスはこの時アブデラとマロネシアを略奪して引き上げている。カレスが軍船二〇隻を率いてネアポリス近辺で追撃したが、ピリッポスは策略を用いて無事に逃れた、という。²⁹⁾このことから、ピリッポスは実際には比較的小兵力でやってきたことがわかる。彼は、この時までテッサリアのペライやギリシア中部のボキスなどに敵を残していた。³⁰⁾また、ディオドロスからは、前三五六年にピリッポスがポティダイアを攻略したとき、守備隊のアテナイ人を寛容に送り返したことが知られている。というのも、彼はアテナイの動向に細心の注意を払っていたからである、と記される。³¹⁾それから二年後にピリッポスはマロネシアへやってきたのだが、いまだ後方に敵を残していたので、アテナイと正面から衝突する力はまだ持たなかったであろう。パネメネスはアルタバゾスへの合流を最優先にしているので、ピリッ

ボスに協力する余地はない。ピリッポスがここでケルソブレプテスに協力しても、彼自身にとっては何の得にもならない。この時のピリッポスの動向は威力偵察か、示威行為程度のもではなかったか。

一方で、ピリッポスを追撃したカレスは、ピリッポスの残置したと見られる守備隊を撃破しており、その後テッサリアのバガサイ湾にボキス支援のために姿を見せている。³²ケルソブレプテスがピリッポスに味方しようとしたなら、カレスはケルソブレプテスを攻撃するはずであろうが、アテナイはカレスにそうした軍事行動を命じていないのである。アマドコスがピリッポスを阻止したとデモステネスは言うが、実際にはパンメネスは小アジアで活躍しており、³³ピリッポスのマロネイア略奪も防げていない。従って、ケルソブレプテスは彼らを穩便に通過させるために、誓約をしたのではないであろうか。

アイスキネスは、同盟市戦争頃（前三五八年―前三五五年）にケルソネソスにとって脅威であったのは、ピリッポスであったとしている。³⁴当時のピリッポスはまだケルソネソスから離れた地域で活動しているので、これは誇張であろう。一方で、ケルソブレプテスがケルソネソスにとって特に脅威とされていないことが注目される。イソクラテスは第八弁論「平和について」の中で、同盟市戦争敗北を受けて、アテナイに従来の帝国政策の放棄を訴えている。定期的にピリッポスのマロネイア来寇とほぼ等しいこの作品で、彼は、アテナイ人が領土的野心を見せないなら、ケルソブレプテスがケルソネソスに戦争を仕掛けることは、断じてないであろう、としている。³⁵アテナイとの戦争という大規模な軍事行動を企図していたなら、兵力の徴募や軍需物資の集積など、それなりの準備がある。そうなると、戦争の意図を完全に隠し通すことは困難となる。ケルソブレプテス側は少なくとも積極的にケルソネソスへ攻勢をかけようとはしていなかったことになる。この時期、ケルソブレプテスはケルソネソス侵攻を企てた形跡を残していない。次章では、ケルソブレプテスが他のオドリュサイ諸王や周辺諸勢力を攻めたとされる事態が事実かどうかを検討したい。

- ① Dem. XXIII 183.
- ② Diod. XVI 31. 4.
- ③ Diod. XVI 31. 6; *IG* II² 130.
- ④ Diod. XVI 34. 1.
- ⑤ Polyaeus. IV 22.
- ⑥ *IG* II² 126. II 4-21.
- ⑦ Dem. XXIII 170.
- ⑧ Nep. *Milit.* 1-2; Hdt. VI 34-35 などによつて、アテナイは当初シゲイオンにブリュノンと植民者たちを送り込み、ヘレスポントス南岸の支配を目指した。Plut. *Mor.* 855a-b; Diod. IX 12. 1 にアテナイとリュティレネの長期にわたる抗争が記されている。リュティレネの支配者ヒッタロスは元来トラキア系エトニア人の名前であり、Diog. Laert. I 74-81 は彼の父をトラキア人としてゐる。
- ⑨ Xen. *Mem.* III 6. 2-13 にそれは、民会によつて食糧の確保は大きな関心事であつたとする。Xen. *Hell.* V 1. 28-29 には、ヘレスポントスをスパルタが制圧して食糧供給に困難をきたしたアテナイは和平を結んでコリントス戦争を終結させたのである。アテナイはこの国家よりも穀物を大量に消費してあり、Dem. XX 31-32 では、黒海方面からの輸入穀物は約四〇万メディムノイであり、黒海方面からの輸入穀物の総量は、他の輸入先からの穀物の総量に匹敵するといふ。アテナイの穀物確保とポントス方面への政策の展開については、篠崎三男『黒海沿岸の古代ギリシア植民地』（東海大学出版会、二〇一三年）二二一―二四〇頁を参照。
- ⑩ Dem. XXIII 115, 130-132, 156, 158; Hyp. IV 1.
- ⑪ Cf. L. Domaradzka, "Greco-Thracian Relations in the Upper Maritsa Valley (5th–4th Centuries B.C.) (Based on Epigraphic Evidence)," in J. Bouzek & L. Domaradzka (eds.), *The Culture of Thracians and Their Neighbours: Proceedings of the International Symposium in Memory of prof. Mieczysław Domaradzki, with a Round Table "Archaeological Map of Bulgaria"* (Oxford, 2005), pp. 19-26.
- ⑫ SEG XLIX 911. II 20-37.
- ⑬ ビステイロス碑文に関しては数多くの研究があるが、読み方や復元・ビステイロスの位置・碑文の発行者・碑文に現れる人々の実態など、研究者の間でも意見が分かれている。よゝめたつては、以下の文献に問題点が整理されている。M. B. Hatzopoulos, "Τὰ τῶν ἐπιγραφῶν φυλάνθηοντα: Observations on the Pistiros Inscription (SEG LIII 486)," in P. Martzavou & N. Papazarkades (eds.), *Epigraphical Approaches to the Postclassical Poles* (Oxford, 2013), pp. 13-21.
- ⑭ Porozhanov, *op. cit.*, p. 253.
- ⑮ I. Lozanov, "On the Import Amphorae in Thrace (6th–3rd Centuries B.C.): Reflections on Some Recent Discoveries in the Middle Hebrus Valley," *Varia Antologica* 21 (2010), pp. 86-87.
- ⑯ *Ibid.*, p. 89.
- ⑰ E. I. Paunov, "Introduction to the Numismatics of Thrace, ca. 530 BCE-46 CE," in J. Valeva, E. Nankov & D. Granger, *op. cit.*, pp. 265-292.
- ⑱ *Ibid.*, pp. 274-275. ケルソネソスの貨幣はブルガリア北西部、ソフィアからは北東にあるボテグラトとルコヴィトあたりを北限として出土するが、ヘブロス川上中流域から最も濃密に出土する。バリオンの四ミラクトブ貨幣も同じ地域から出土する。Z. H. Archibald, *Ancient Economies of the Northern Aegean: Fifth to First Century BC* (Oxford, 2013), p. 229. トラキア最古の貨幣は前六世紀後半のものである。オムルナサイ王国では前五世紀から貨幣の比重が増えている。

方で、銀の延べ棒や銀製の水差しなどにギリシアの貨幣価値が刻まれたものが確認されており、当地での貨幣経済の比重の高さを裏付けている。C. Tzochiev, "Trade," in J. Valeva, E. Nankov & D. Granger, *op. cit.*, p. 419. ベステイロス碑文の出土したブルガリア内陸のベトマン近郊遺跡からも、パリオンの貨幣と並んでケルソネソスの貨幣は多数出土している。両貨幣だけで出土貨幣の五二%を占めており、その中でもケルソネソスの貨幣のほうが多数を占める。V. Taneva, "The Trade Contacts of Pistrros," in J. Valeva, E. Nankov & D. Granger, *op. cit.*, pp. 27-29.

¹⁹ *Ibid.*, p. 269.

²⁰ 先マケドニア時代の貨幣埋蔵物。Archibald, *op. cit.*, pp. 128-129 Table 5.1.

²¹ オドリュサイ王国によるギリシア人からの貢納取り立ては、既に Thuc. II 97.3²⁶、前五世紀中には確認される。Dem. XXIII 110.177 で、ケルソブレテスはアテナイに対して、ケルソネソスにおける賦課金と一〇分の一税徴収の権利を要求している。IG II² 126.1.14 にも貢納の記述がある。

²² ギリシア系貨幣の出土事例に比較して、オドリュサイ諸王の貨幣は通常きわめて少数しか見つからない。エーゲ海北岸からの出土事例に関しては、以下の文献を参照されたい。Pamov, *op. cit.*, p. 274. サモトラケ人の植民市であるエーゲ海北岸のメセンブリア・ソノで出土した貨幣二二九枚のうち、前四世紀のオドリュサイ諸王の貨幣は四枚、アプデラ出土の二九二五枚の貨幣のうち、オドリュサイ諸王の貨幣は二枚のみ、タソスからはオドリュサイ諸王の貨幣はまだ見つっていない。これに対してマケドニアからの出土事例では東部マケドニアからの出土は一枚のみで、中部マケドニア出土貨幣三八四七枚のうちオドリュサイ諸王の貨幣は一〇枚のみである。マケドニアでの事例につ

づいて、以下の文献を参照のよう。C. Gatzolis, V. Poulios & D. Terzopoulou, "Coins of Thracian Kings and Rulers from Western Thrace, Eastern and Central Macedonia (5th-3rd c. BC)," in *Thrace in the Graeco-Roman World: Proceedings of the 10th International Congress of Thracology, Komotini, Alexandroupolis, 18-23 october 2005* (Athens, 2007), pp. 176-182.

²³ Cf. Dem. XXIII 183. 木曾・杉山訳「前掲書」一八三頁（木曾訳に 4592）。

²⁴ Dem. V 25; [Dem.], VII 42; Dem. XXIII hyp. 2-3.

²⁵ Hammond & Griffith, *op. cit.*, pp. 264-265; Harris, *op. cit.*, p. 76; Buckler, *op. cit.*, p. 179; Archibald, *op. cit.*, p. 232; Delev, *op. cit.*, p. 49.

²⁶ Theopomp, fr. 101.

²⁷ E. Badian, "Philip and Thrace," *Pulchreva* 4 (Sofia, 1983), pp. 58-59.

²⁸ *Ibid.*, p. 60, n. 34.

²⁹ Polyæn, IV 22.

³⁰ テッサリアでは、ペライの僧主がテッサリア諸ポリスおよびマケドニアと敵対していた。ピリッポスはテッサリア人に呼ばれてペライの僧主リュコブロンと初めて交戦した。ポキスはペライを支援して、援軍を派遣している。ピロメロスが戦死した後、Diod. XVI 35.1-4 にポキスではオノマルコスが全権將軍となり、デルボイの聖財を用いて大幅な戦力増強を行った記述がある。Diod. XVI 37.3 でペライの僧主はポキスに退去して、ポキスの全権將軍パウロスの軍へ合流した。

³¹ Diod. XVI 8.5.

³² カレスに 458 ピリッポスの守備隊撃破につづいて、Athen. XI 532d-f = Theopomp, fr. 249。テッサリア沖合のカレスの艦隊につづいて

は³⁴ Diod. XVI 35. 5°

³³ パンメネスの小アジアにおける活動は³⁵ Diod. XVI 34. 2. Polyæn. V 16. 2 に記録されている。

³⁴ Aeschin. II 72-73 は、ピリッポスがレムノス、スキュロス、インプロスなどをめぐってアテナイ人と争い、アテナイ市民たちはケルソネソスを放棄し始めていたこと、ピリッポスがケルソネソスに向けて進撃していた、という。しかしながら、Diod. XVI 21. 2 に同盟市戦争期にレムノスとインプロスを攻撃したのは、キオス・ロドス・リュ

サントイオンなどの同盟市側の艦隊であったとしている。これに対して Dem. IV 34 では、ピリッポスがレムノスとインプロスを略奪して人々を連れ去ったことが記されている。

³⁵ Diod. XVI 3. 1. ピリッポスは金山で有名なクレニデスを奪い、ピリッポイと改名した。その他に Diod. XVI 8. 2 にアンピポリス攻略、*Ibid.* 6 にピリッポイの金山の改良などが書かれている。

³⁶ Isocr. VIII 22.

第三章 ケルソブレプテスと他のオドリュサイ諸王

ケルソブレプテスは、他のオドリュサイ諸王を攻めて王国再統一を狙った、とされている。一度目は「カレスの平和」締結の直後とされる。二度目は前三五二年頃のことと、この時の彼の侵略行為がピリッポスの王国への介入を引き起こした、と考えられている。以下、この二点について考察し、ケルソブレプテスが本当にオドリュサイ王国再統一を試みたのかどうかを、明らかにしたい。

一 西王国とケルソブレプテス

デモステネスの主張では、ヘレスポントスからアテナイの軍が姿を消し、西王国のペリサデスが死ぬと、ケルソブレプテスはペリサデスの子等と中王国のアマドコスを攻めようとした。しかしながら、彼らが結束して抵抗することは明らかだったので、彼の傭兵隊長カリデモスをアテナイの将軍に選出するようにアテナイ人に持ち掛け、自己を有利な立場に置こうとした、と非難されている^①。

「カレスの平和」が成立した時期にアテナイは同盟市戦争の只中だったので、カレスの軍はこのためにオドリュサイ王国から引き揚げた。次に、西王国のペリサデスの死が述べられている。実は、この時の状況に該当する碑文が残されている。この碑文には、前三五六年にピリッポスの台頭を受けてイリュリア人・パイオニア人・トラキア人に加えてアテナイが同盟を結成したことが刻まれている。トラキア代表は「ケトリポリスとその兄弟たち」とされ、彼らがペリサデスの子等と考えられている^③。一方で、ディオドロスがこの顛末を記している。イリュリア・トラキア・パイオニアの諸王はピリッポスの勢力拡張を受けて、互いに軍事同盟を結んだ。彼らはピリッポスの勢力拡大を猜疑心をもって見ていたが、個々の力ではかなわずに手痛い打撃を被っていた。そのため、同盟を組めばピリッポスへの対抗が可能になる、と考えた。一方のピリッポスはいち早く軍備を整えると、彼らを各個撃破して自己の傘下に組み入れた、という^④。アテナイが同盟市戦争のため、これら諸勢力に適切な援軍を送れなかったことが、同盟瓦解の一因であろう。

紀元五世紀の地理学者ビュザンティオンのステパノスは、古辞書からの引用でピリッポスが前三五七年頃に奪取したピリッポイについて述べている^⑤。ピリッポスはこの時古くから金鉱で有名であったクレニデスをトラキア人が攻囲していたところを救出して、これをピリッポイと名付けた、としている。この場合のトラキア人についてエリントン^⑥は、ケトリポリスであろうという。一方で、グリフィスとエリスはケルソブレプレテスのことであろう、とする^⑦。先ほどのディオドロスの叙述から、イリュリア・パイオニア・トラキアの各勢力は反マケドニアの同盟を組む以前から、しばしば各々がピリッポスによって打撃を被っていることがわかる。従って、クレニデス近辺へ進出していたのはケルソブレプレテスではなく、ケトリポリスかあるいはその先代のペリサデスのほうであった、と考えられる。

ここから明らかなことは当時のオドリュサイ王国、とりわけ西王国にとって脅威であったのはケルソブレプレテスではなくて、ピリッポスだったことである。アテナイにも同様に、ケルソブレプレテスのほうを特に警戒している素振りは見られない。デモステネスは、西王国と中王国が連合してケルソブレプレテスに対抗する可能性を述べている。しかしながら、両

者は結束の暇もなくピリッポスによって西王国を奪われているのである。この時期に、ケルソブレプテスが何らかの軍事行動を起こした形跡は皆無である。このことから、ケルソブレプテスは前三五六年段階で、あからさまに王国再統一を狙う行動をしていないことになる。

二 ピリッポスの侵攻と中王国をめぐる争い

前三五二／一年頃と目されるケルソブレプテスの王国再統一の試みは、史料に明記されているわけではない。あくまでも研究者たちによる見解である。アイスキネスの古注釈には、「ビュザンティオン人とペリントス人とトラキア人アマドコス、ケルソブレプテス王に対して、トラキア中央の定まらない国土のために戦争を始め (Βυζαντιοὶ καὶ Περίντοιοι καὶ Ἀμαδοκοὶ ὁ Θράξ Κεροσβλήτην τῷ βασιλεὶ μέγας Θράκης ὑπὲρ ἀμφιλόγου χωρὸς ἐξηγεῖσθαι τὸν πόλεμον)」^⑧、それに続けてピリッポスは彼らを支援してケルソブレプテスと戦い、係争中の土地を彼らに与えて友人とした、とある。その後ケルソブレプテスから人質をとってマケドニアに連れ去った、といった意味のことが書かれている。アイスキネスの古注釈では、ピリッポスはケルソブレプテスに敵対した陣営にとつては、解放者ないし友人として描写されている。諸研究者はこれまで、前三五〇年代におけるピリッポスのオドリュサイ王国侵攻が、どの程度の成果をあげたのか、という観点からアイスキネスの古注釈を分析してきた。一部の研究者は、文字通りこの時ピリッポスがケルソブレプテスから人質をとって降伏させる成果を得た、とする。^⑨一方で、デモステネスを根拠にピリッポスはこの時発病して満足な成果をあげていない、とする研究者もいる。^⑩しかしながら、総じて研究者たちはケルソブレプテスの侵略行為が契機となり、ピリッポスの介入が発生したことは事実であると、見なしている。従って、ケルソブレプテスは周辺諸勢力に対する侵略者という位置づけのまま、特に見直しをされてこなかった。^⑪

古注釈というものはあくまでも後代の注釈なので、典拠や書き手の特定は一般に困難である。^⑫ハモンドは、アイスキネ

スの古注釈はテオポンポスから情報を得た、とする。¹³ テオポンポス第一巻に、ごく短く、アマドコスがケルソブレプテスとの戦いでピリッポスと同盟したことが伝わる。¹⁴ しかし同史料は断片のため全容が明確でなく、ハモンド説の可否を検証できない。バイディアンなどは、アイスキネス古注釈の典拠を不明としている。¹⁵ ディッキーによれば、アイスキネスの古注釈は前一世紀の学者ディデュモスに由来する、と推測している。¹⁶ ディデュモスは一定の価値ある情報源ではあるが、全面的に信用できるかどうかは、別問題である。一般的に古注釈の史料価値は玉石混交なのが実情である。

アイスキネスの古注釈の文面そのものからは、アマドコス側から戦争を始めたように解釈できるので、ケルソブレプテスが一方的に侵略を開始したように解釈するには無理がある。上記のアイスキネスの古注釈に見られる「定まらない国土」をめぐる争いとなれば、これは境界争いの類の意味であろう。なぜなら「カレスの平和」で王権の三分割が決められているので、領地配分についても大枠で決まっているはずだからだ。境界争いは古代ギリシアでは珍しいものではなく、枚挙にいとまがない。¹⁷ それ故、境界争いがあるからという理由だけで、ケルソブレプテスを一方的に侵略者とは断定できない。結局、アイスキネスの古注釈だけでは、前三五〇年代末にケルソブレプテスが王国再統一に乗り出したかどうかはわからない。

他方、デモステネス二三番からは前三五二年段階でもオドリュサイ王国が三分裂したまま平穏であること、ピリッポスも特段の脅威とされていないことが各所にうかがえるので、¹⁸ これ以前にピリッポスがケルソブレプテスの領内にまで攻め込んでいないことがわかる。これがデモステネス第三番弁論になると、前三五〇年代末にピリッポスが大規模な侵攻を行ったことが記されている。以下にその箇所を引用する。

いまから三十四年前、ピリッポスはトラキアの地において、ヘライオンの要塞を攻囲しているとの情報がわれわれに届いたときの事です。それはたしか、マイマクテリオンの月のことでした。そのとき、諸君の間では多くの議論が交わされて、たいへんな騒ぎに

なったのだが、諸君は四〇隻の三段櫓船を港に降ろして、それには四五歳以下の年齢の市民たちが自ら乗り組むようにし、そして六〇タラントンの戦時財産税を徴収することを決議したのです。そしてその後、その年は過ぎて、（翌年の）ヘカトンバイオンの月、ついでメタゲイトニオンの月、ボエドロミオンの月になったが、そのボエドロミオンの月に、（エレウシスでの）秘儀も終わってから、諸君はやつとのこと、カリデモスを指揮官とした、兵員が乗っていない一〇隻の船を銀五タラントンとともに派遣したのです。しかし、ピリッポスは病氣にかかっているとか、あるいは死んだとかの情報が伝わったので――じっさい、その両方の情報がわれわれには届いたからだ――アテナイ人諸君、諸君はもはや救援の時期ではなくなったと考えて、遠征を取りやめてしまったのだ。（中略）なぜなら、そのときにもしわれわれが熱意をもって救援軍をかの地（トラキア）へ送っていたなら、ピリッポスは生き長らえて、今われわれを悩ますことはなかったでしょうから。¹⁹⁾

引用史料冒頭より、デモステネス第三弁論を遡ること三／四年前、即ち前三五二／一年頃にピリッポスの侵攻があったことがわかる。²⁰⁾ 上記の史料は、アイスキネスの古注釈に該当するものとして注目される。しかし、ここからもケルソブレプテスの侵略が契機となつて、ピリッポスの侵攻を呼びこむ結果となつたのかどうかはわからない。ディオドロスからは、前三五三年頃にケルソブレプテスが「アテナイに対する友好とピリッポスに対する敵意のため」、ケルソネソスを譲渡してアテナイのクレルコイが送り込まれたことが知られる。²¹⁾ これによって、一部の研究者が主張するようにアテナイがケルソブレプテスの王国再統一を容認した形跡もない。²²⁾ なぜならデモステネス二三番は、ケルソブレプテスがカリデモスのアテナイの將軍選出に伴い、アンピポリス奪回を提案していることしか記していないからである。²³⁾ 即ちケルソブレプテスはオドリュサイ王国再統一を公言しておらず、ピリッポスの進出を警戒していることが明らかである。

バラバノフはコテュスの王権を再検討して、王国内に多くの半独立の部族を内包するため、彼の王権は限られた力しか持たなかった、と結論付ける。²⁴⁾ コテュス暗殺後に、ケルソブレプテスら三人のオドリュサイ諸王は互いに争いながら、ア

テナイとの友好関係構築を模索している。²⁶⁾ 彼らは互いに絶対的優位を示すことが出来ないもので、アテナイと結ぼうとしたことが明らかである。デモステネスはオドリュサイ王国を分裂状態に置くのが望ましいと主張し、カリデモスへの特権付与に反対した。²⁶⁾ アテナイの周囲に比較的弱体な同盟国を配置するという、一種の勢力均衡策は同時期のデモステネス第一六番弁論「メガロポリス人のために」でも主張されている。²⁷⁾ これらのことから、分裂したオドリュサイ諸王は、ほぼ拮抗した勢力しか持っていないことがわかる。ポリュアイノスでは、ケルソブレプレテスの統治下で反乱が発生したことを伝えるものがある。「ケルソブレプレテスの一族が謀反を起こし、莫大な財物を奪い去った。ケルソブレプレテスは一族と和解したあと、彼らをそれぞれ異なった市の市長（アルコン）に任命した。しばらくすると、よそに移されていた財物が元の場所に戻された。するとケルソブレプレテスは一族の者たちを捕らえて各市から追放し、その金を自分のものにした」²⁸⁾、というものである。実際には、この伝承に相当する事態が他の史料から確認できないので、これは信憑性に問題のある史料であろう。しかしながら、この逸話からはケルソブレプレテスの王国には克服しなければならない脆弱な構造が存在したことがうかがえる。

従って、ケルソブレプレテスが単独で王国再統一を試みても、それはほとんど成算がなかった。先のデモステネス第三番弁論からは、当時のアテナイは援軍派遣に一〇ヶ月費やしているうえ、結果的にわずかな援軍を派遣したものの、ピリッポスの追撃を試みることもしていないことが明らかである。アテナイはケルソブレプレテスを支援して、積極的に攻勢に出る政策をとっていないのである。前四世紀半ば以降、アテナイでは財政難と続く戦争のため、厭戦気分が高まっていた。前三六二年のマンティネアの戦い以降、ギリシア諸国は戦争に疲れて普遍平和条約を締結している。²⁹⁾ しかしながら、現実にはアテナイはなおも各地での戦争に巻き込まれていた。早くも、前三六二年晩夏には広範な穀物不足のせいで、アテナイの穀物輸送船が拿捕されるなど、各地で鎮圧を要する反アテナイ的活動が続発している。³⁰⁾ 同じ頃、アテナイはオドリュサイ王国の内紛にも介入してコテュスの政敵を支援したが、財政難のせいでコテュスの反撃を許してしまう。³¹⁾ 同盟

市戦争による被害も甚大で、アテナイからはメトイコイや外国人などが逃げ出したせいで商業面の収入が低下したことが知られている。^③ オドリュサイ王国とは「カレスの平和」が実現したものの、台頭してきたピリッポスとは前三四六年のピロクラテスの和約にいたるまで、一〇年にわたって断続的に戦っている。前三五〇年代という時期は、アテナイがこれ以上余計な戦争をすることは避けなければならなかった時期にあたる。前三五〇年代から前三四〇年代にかけて、アテナイではエウプロスという傑出した政治家の指導で、財政面では大きく復興を上げつつある時期でもあった。^④

デモステネスは盛んにケルソブレプテス側の領土拡張の野望を訴えるが、それに対するアリストクラテス側の要求はカリデモスのアテナイの將軍就任と不可侵特権の授与である。オレオス出身の傭兵隊長であったカリデモスは、ケルソブレプテスと姻戚関係にある最側近の一人とも言える人物である。^⑤ 彼はアテナイとオドリュサイ王国との和平交渉を成立させるという功績により、アテナイ市民権や金冠、善行者の称号などを授かり、そのままケルソブレプテスのもとに滞在している。ケルソブレプテスがアテナイに反旗を翻すようなことをしていれば、カリデモスも行動を共にするはずであろう。

しかしながら、カリデモスが何らかの反アテナイ的活動のせいで市民権を剝奪されるなどの処罰を受けたことはなく、その後もアテナイの軍事指揮官として登場してくる。^⑥ 彼らがアテナイに求めた特権は、ケルソブレプテス側がアテナイを欺いたとなれば、直ちに剝奪できる性質のものでしかない。彼らにとってみれば、アテナイをだましてまで獲得するほど価値のある特権ではない。カリデモスがアテナイから処罰を受けた形跡がない以上、ケルソブレプテスがアテナイから離反するような姿勢を持っていなかった、という傍証になりえるであろう。以上のことから、前三五〇年代末にケルソブレプテスが単独ないしアテナイの支援を得て、王国再統一のために周辺諸勢力に侵略を行った可能性はほとんどない、と考えられる。

三 ピリッポスの動向

ケルソブレプテス側に王国再統一の動きがなかったとすれば、ピリッポス側の動向がいかなるものであったのが、事態を明らかにする鍵となる。ユスティヌス「ポンペイウス・トログスのピリッポス史抄」によると、「ピリッポスも同盟国に対して、（アテナイ人よりも）誠実であつたわけではない。（中略）また彼の指導下で戦つた国々を、そして彼と自らに勝利の祝詞を述べた国々を敵国として占領し、略奪したからである。彼は、彼の王権に服したすべての者の妻や子供を売り払つた。（中略）トラキアへ渡り、そこで同じような不誠実さで戦争を遂行し、隣接の王たちを騙し討ちで捕えて殺し、その地方全体をマケドニアへ加えた。（中略）このあと彼はオリュントスを攻撃した。（中略）このようなことがあつて後、トラキア王であつた兄弟二人がはからずも彼を彼らの紛争の仲裁人を選ぶという事態が生じた。（中略）しかし、ピリッポスは彼の本性に基づくいつものやり方で、あたかも戦争に着手するかのようになり、仲裁に取り掛かり、訓練の行き届いた軍隊で不意に兄弟たちを襲い^{③7}、彼らの王国を奪つた。この史料の信憑性はどうか。ユスティヌスの典拠について、ハモンドはテオポンポスをあげている。ユスティヌスはテオポンポスの「ピリッピカ」の影響を受けて成立していることが知られており、ハモンド説には一定の妥当性がある。テオポンポスは同時代史料であり、大筋で歪曲はしないが、ピリッポスを悪者として扱う傾向にある。それ故、細部まで信用できるかどうかは別問題となる。ピリッポスは同盟国を常に粗略に扱つたわけではなく、テッサリアとは友好関係を維持している^{④1}。人々の妻子を全て売り払つたというのも誇張であり、オリュントスやポテイダイアなど一部でそのようなことが見られたにすぎない^{④2}。問題は、前三四九年のオリュントス攻め以前の記述であり、そこではピリッポスがケルソブレプテス以西の王たちに対して、能動的に攻勢に出ていることが読み取れる。

これに対応しているのが、デモステネス第一弁論である。それには「その後彼は、ペライヤやパガサイやマグネシアなど、

テッサリア地方の残りのすべての都市を自分の望むとおりの仕方では処理した上で、トラキアへ向かって立ち去っていったのだ。そしてその地で彼は、部族の王たちのうちある者たちは追放し、他の者たちは王の地位につけたあとで、病氣にかかったのであるが、病氣が回復してからも、彼は何もせずに怠けていたのではなく、ただちにオリュントス人たちに攻撃を仕掛けたのである⁴³、とある。ここにはピリッポスの病氣以前の行動をうかがうことが出来るのだが、その際に彼がケルソブレプテス以西の王たちを強引な手法で処理したことがわかる。言うまでもなく、デモステネスはピリッポスの敵対者であるため、この内容を信じていいかどうかは慎重に判断されなければならない。それを解き明かす鍵になりそうであるのが、伝デモステネス第一二番弁論「ピリッポス書簡」である。本作は、デモステネスの作と伝わるが、内容的に見て前三四〇年頃にピリッポスがアテナイと開戦する前にアテナイによせた最後通牒と、密接に関係すると思われるものである⁴⁴。それによると、「しかし、他のことに加えてまた、諸君は、テレスとケルソブレプテスがトラキアを支配することを認めるように私に要求すると決議に書き入れた。彼らがアテナイ人だからだと言うのだ。しかし私は、彼らが諸君とともに講和協定に加わったとも、碑にその名前が刻み込まれているとも、そもそもアテナイ人であるとも承知していない。むしろテレスは私とともに諸君との戦いに加わったのであり、（中略）だから、彼らを追放した国の人々を諸君たちが説得して、それぞれの市民たちが追放された者たちに再び支配を許すのなら、テレスとケルセブレプテスが支配していた分だけトラキアを私から持ち去ればよい、という⁴⁵。

この和約とは、前三四〇年にピリッポスとアテナイとの間で成立したピロクラテスの和約のことを指す。この和約が正式に発効された時点で両者の勢力圏が固定されることになっていたが、最終的にケルソブレプテスはアテナイの同盟者とは承認されず、ピリッポスによって征服されている⁴⁶。デモステネスやアイスキネスに和約時のケルソブレプテスの扱いをめぐる動きは記されているが、テレスという人物に関しては何も記録がない。アイスキネスによると、ケルソブレプテスの使節ランブサコスのクリトブロスなる人物が、ピリッポスに対して誓約を行うこと、ケルソブレプテスもアテナイの同

盟の一員に加えられるべきことを要求してきたことが記されている。ペレクス区のアレクシマコスなる人物がアテナイの議長団に動議案を手渡したが、その中にはケルソブレプテスの使節が他の（アテナイ）同盟国と共に誓約を行うという議案が書かれていた。この時、議長団の一員であったデモステネスは、クリトブロスの要求を票決にまわすことを拒否している。その後市民の要求によって、この議題は民会で票決にふされたが、最終的には否決されてケルソブレプテスはアテナイの同盟者と見なされなかった、という。⁴⁷「ピリッポスの書簡」にあるように、アテナイ人が決議にケルソブレプテスの名を入れたというのは、事実ではない。アテナイ人はケルソブレプテスを見捨てた格好になっているのだが、デモステネスの拒否に関わらず民会に採決が委ねられたということは、市民の一部にケルソブレプテスを擁護しようとする人々がいたことが示唆される。

ここで問題となるのは、テレスである。このテレスはオドリュサイ人に多く見られる名前だが、この場合は一般的に中王国のアマドコスの後継者テレス二世（以下、テレス）を指す、と見られている。⁴⁸アマドコスが前三五〇年代末以降に姿を消す事、ピリッポスがケルソブレプテス以西の王を自分の都合のよいように処理したこと、アマドコスとテレスの発行した貨幣の図像が似通っていることなどが、根拠とされている。

一方で、テレスをアマドコスの後継者と見なすことに否定的な研究者もいる。⁴⁹貨幣の図像だけでは根拠が薄弱なこと、デルポイ出土の碑文にケルソブレプテスの四人の子を称賛したものがあり、その中にテレスの名があるからである。⁵⁰テレスがケルソブレプテスの子ということになると、彼は父に背いてピリッポスと共闘したことになる。近年の貨幣研究によれば、オドリュサイ諸王の発行貨幣はギリシア系のものに比べてはるかに少なく、経済的な目的で発行されたものではない。それらの貨幣は王位継承などに伴い、王の権威を誇示するために鑄造されたものだと考えられている。⁵¹アマドコスとテレスの貨幣は酷似した図像をしており、表側に互い違いに交錯した二つの斧、裏側にはブドウの房と蔓というものである。⁵²これに対してコテュスとケルソブレプテス父子の貨幣は表側に人物（神）の横顔、裏側には二つの取っ手のある水差

しというもので、アマドコスとテレスのものとはデザイン的に全く異なっている⁵³。ケルソブレプテスは貨幣の図像をもって、自己をコテュスの正統な後継者であることを主張しているのであろう。

パウノフの統計によると、古典期に限って見ればオドリュサイ諸王の中でコテュスの発行貨幣が最も多く出土しており、それは二〇〇枚となっている。それに次いでテレスの出土貨幣は多く、一六〇枚である。同時期の出土貨幣の事例では、アマドコス二世が九五枚、ケトリポリスが五五枚、ケルソブレプテスのものは四五枚となっている⁵⁴。もちろんこれらは偶然発見された考古学的資料である。今後の発掘調査の進展によって、発見される枚数は変動していくことは明らかである。それでも出土貨幣の枚数は、各オドリュサイ諸王の実力に関してある程度相応に比例するものであろう。コテュスの貨幣が一番多いのは、古典期において彼が相対的にオドリュサイ諸王の中では傑出した王権を築いた実力者であったことを示唆する⁵⁵。これに対してテレスの貨幣がコテュスの出土貨幣に次ぐほど発見されているということは、彼もそれなりの力を有した王であったことを示唆する。もし彼がケルソブレプテスの子テレスであったなら、正式に王位を継いでないのだから、これだけの貨幣が出土するのは不自然である。また、デルポイ出土の碑文に見られるテレス以外のケルソブレプテスの子たちの貨幣は見つかっていない。そうすると、テレスはやはり正式に王位を継いだ人物だったのではないだろうか。

それ故、テレスをアマドコスの後継者としても、不自然ではないように考えられる。仮にテレスがケルソブレプテスの子であっても、なぜアテナイは自らに敵対したテレスを味方のように和約に含めようとした、と書簡の中で非難されているのか。また、ピリッポスの同盟者であったはずの彼は、何故ケルソブレプテスと同様に追放されたのであろうか。ユステイヌスとデモステネスを併せて考えてみれば、テレスは当初ピリッポスに従ったものの、不本意な形での従軍を強いられたのではなかったか。そうした事情が、この矛盾するような記述に現れていると考えられないだろうか。その後不満を抱えたままのテレスは、ピリッポスに反旗を翻して追放されたとすれば、話の筋は通ってくる。このように検討してみると、前三五〇年代にケルソブレプテスが周辺諸勢力に対して、領土拡張を狙うような攻撃的政策を行ったことはなかった

ように考えられる。ユスティヌスやデモステネスの記述を全面的に信じていいかどうかは別にして、両者とも基本線で事実を記しているであろう。即ち、ピリッポスのほうが能動的に強引なオドリユサイ王国侵攻を行ったのが、実態に近いのではないだろうか。

- ① Dem. XXIII 10, 179.
- ② *IG* II² 127, ll 2-4.
- ③ Cawkwell, *op. cit.*, p. 44; Sealey, *op. cit.*, pp. 111, 122; P. J. Rhodes & R. Osborne (eds), *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC* (Oxford, 2003), p. 237.
- ④ Diod. XVI 22, 3. Cf. Dem. I 23; Plut. *Alex.* 3, 8-9.
- ⑤ Steph. Byz. s. v. Φαίτρον.
- ⑥ R. M. Errington, *A History of Macedonia* (Berkeley & Los Angeles, 1990), p. 47.
- ⑦ Hammond & Griffith, *op. cit.*, p. 247; J. R. Ellis, *Philip II and Macedonian Imperialism* (London, 1976), p. 68.
- ⑧ Schol. Aeschin., II 81. ケルンフレイテスの子が人質として、マケドニアのペラに送られることがアイスキネスらアテナイの使節団によって目撃されていることが、Aeschin., II 81に見られる。しかしこれは、木曾明子訳『アイスキネス弁論集』（京都大学学術出版会、二〇一二年）一四三頁・註（二一）では「文脈から見て前三四六年のことであると考へている」。
- ⑨ G. Cawkwell, *Philip of Macedon* (London, 1978), p. 44, 80; Hammond & Griffith, *op. cit.*, pp. 282-283; R. M. Errington, *Geschichte Makedoniens* (München, 1986), p. 52.
- ⑩ Badian, *op. cit.*, p. 62; E. M. Harris, *Aeschines and Athenian Politics* (Oxford, 1995), p. 45; 髙田「前掲論文」一五頁。
- ⑪ C. Veligami-Terzi, *op. cit.*, pp. 294ff. 298; Φοα, Πτομα & Υποπανορ, *op. cit.*, p. 228. ケルンフレイテスは「アテナイにケルンネオンを譲渡して、マケドニアに対するアテナイの保護を解除させ、から侵略を開始した」Delev, *op. cit.*, p. 49.
- ⑫ S. Hornblower & A. Spawforth (eds), *Oxford Classical Dictionary* (Oxford, 1996), p. 1368; R. Nünlist, *The Ancient Critic at Work: Terms and Concepts Literary Criticism in Greek Scholia* (Cambridge, 2009), p. 17.
- ⑬ N. G. L. Hammond, *Philip of Macedon* (Baltimore, 1994), p. 84.
- ⑭ Theopomp., fr. 101.
- ⑮ Badian, *op. cit.*, p. 62 n. 45.
- ⑯ E. Dickey, *Ancient Greek Scholarship: A Guide to Finding, Reading, and Understanding Scholia, Commentaries, Lexica and Grammatical Treatises, from Their Beginnings to the Byzantine Period* (London & New York, 2007), p. 53.
- ⑰ オロポスをめぐってアテナイとマケドニアとの対立については、Helanikos, fr. 22; Konon, fr. 1; Ephoros, fr. 22; Thuc., V 3, 18, 36, 39, 42。マケドニアとマケドニアの国境争いについては、Androti., fr. 70; Philoch., fr. 155; [Dem.], XIII 2; Dem. XXIII 212。マケドニアとマケドニアの国境争いについては、Thuc., I 103。マケドニアとマケドニアの国境争いについては、Diod., XIX 67, 3-4。
- ⑱ マケドニアとマケドニアの国境争いについては、Dem., XXIII 103, 123, 189。

で各々がアテナイと友好関係にあることが述べられる。Dem. XXIII 107-109, 112, 116 でピリッポスのアンピポリス攻略やオリュントスへのポテイタイア引き渡しと言及されている。Athen. XI 532d-f = Theopomp. fr. 249 では、カレスがピリッポスの傭兵隊長アタイオスを撃破して、ボキスからデルポイ神殿の聖財を謝礼に受け取ったとしている。前三五六年頃にいったんオドリュサイ王国の西王国を下したピリッポスであったが、その後アテナイの逆襲で再びオドリュサイ王国は三分裂状態に戻ったのであろう。

- ¹⁹ Dem. III 43, 加来彰俊・杉山晃太郎・北野雅弘・北嶋美雪・田中美知太郎訳『デモステネス弁論集 1』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）、四五-四六頁（加来彰俊訳に準ずる）。

²⁰ デモステネス第三番弁論は、前三四九／八年のピリッポスによるオリュントス攻撃に対して、デモステネスがオリュントス救援を訴えるものである。ここから三／四年前にピリッポスがケルソブレテス領へ攻め込んだことになる。

- ²¹ Diod. XVI 34, 4, Dem. XXIII 103 にケルソネソスに住むアテナイ人の存在が見られる。

- ²² Φοι. Πτολος & Μοραννοφ. *op. cit.*, p. 228; Delev. *op. cit.*, p. 49.

- ²³ Dem. XXIII 14.

- ²⁴ Balabanov. *op. cit.*, pp. 83-107.

- ²⁵ Dem. XXIII. 102-103.

²⁶ Dem. XXIII 7, 102 ㄱ, テバイはボキスと、スパルタは他の諸ポリスと牽制しあうことがアテナイにとって利益となる、と説かれている。Dem. XXIII 103 ではどのトラキア人も強力でなく、彼らが互いにかみ合うことが、ケルソネソスに住むアテナイ人にとって利益になるとう。

- ²⁷ *Ibid.*, XVI 4-5.

- ²⁸ Cf. Polyæn. VII 31, 戸部順一訳『戦術書 ポリュアイノス 叢書アレクサンドリア図書館Ⅵ』（国文社、一九九九年）、三五二頁（戸部順一訳に準ずる）。

- ²⁹ Diod. XVI 89, 1-2; Pib. IV 33 8f; Plut. *Ages.* 35, 3-5.

³⁰ [Dem.], L 4-5, βυττανταιον, カルケドン, キュニコスによるアテナイの穀物船拿捕, キュニコスによるプロコネソス攻囲とアテナイに対するプロコネソスからの救援要請。

- ³¹ *Ibid.*, 4-5, 7, 12, 14, 21. Dem. XXIII 104, 130-132.

- ³² Isocr. VIII 21, [Dem.], X 37-39; Theopomp. fr. 166, アテナイの収入が三〇タラントンを越えなう時期が述べた。

³³ G. L. Cawkwell, "Eubulus," *Journal of Hellenic Studies* 83 (1963), pp. 47-67; E. M. Burke, "Eubulus, Olynthus, and Euboea," *Transactions of the American Philological Association* 104 (1984), pp. 111-120.

- ³⁴ Dem. XXIII 129, 163.

- ³⁵ *Ibid.*, 11, 14.

- ³⁶ Athen. X 436b; Philoch. fr. 49-51; Plut. *Phoc.* 16, 3; *IG* II² 207.

³⁷ Cf. Justin. VIII 3-4, 合版學訳『ジュスティヌス・トログス ユニアヌス・ユスティヌス抄録 地中海世界史』（京都大学学術出版会、一九九八年）一五〇-一五二頁。

- ³⁸ N. G. L. Hammond, "The Sources of Justin on Macedonia to the Death of Philip," *Classical Quarterly* 41-2 (1991), p. 503.

³⁹ N. G. L. Hammond, *Philip of Macedon* (Baltimore, 1994), p. 84. ユログスの「地中海世界史」は、テオポンポスの「ピリッピカ」が直接のモデルである。合版訳、前掲書、四九二頁。

- ⁴⁰ M. Flower, *Theopompus of Chios* (Oxford, 1994), pp. 188-189, 210.

- ⁴¹ Diod. XVI 14, 2, XVII 17, 3-4; Polyæn. IV 2, 19; Arr. I 14, 3, II 9.

特にアマドコスとテレスが彼らの貨幣にマロネイア式を採用したとするが、両者の貨幣はマロネイアで直接打刻されたものではないという。

⑤③ Φοι. Πτοιος & Μορπανος. *op. cit.* pp. 210, 236.

⑤④ オドリュサイ諸王の出土貨幣に関しては、以下の通りである。スブラドコス（前四六〇／四五―四三五年）一三〇枚、サラトコス（前四一〇―四〇〇年）一五〇枚、メドコスないしメトコスまたはアマドコス一世（前四〇五―三九一年）八〇枚、セウテス二世（前四一〇／五―三九一／八六年）一〇枚、ヘブリュゼルミス（前三九〇／八七―三八三年）三五枚。Pamov, *op. cit.* p. 281, Fig. 18, 5.

結 論

以上のように、前三五〇年代のオドリュサイ王国のケルソブレプレテスと、エーゲ海北岸世界を中心に分析した結果、以下のような点が明らかとなった。三つに分裂したオドリュサイ王国のうち、東王国のケルソブレプレテスは特に周辺諸勢力に対して侵略的政策を行わず、王国再統一の試みも行っていない。彼は分裂した王国を単独でまとめる力を持たず、自己の王国の存続にあたっては基本的にアテナイの支援を頼りにしていた。オドリュサイ王国と結んだアテナイは、ケルソブレプレテスに対して防衛面での支援をすることはあったが、それを越えて彼の王国が過剰に膨張するような支援は行わなかった。アテナイにはケルソブレプレテスからケルソネソスが譲渡されているが、それによってケルソブレプレテスに対して攻撃的な政策を行えるような援助を行った形跡がない。前三五〇年代のエーゲ海北岸情勢を大きく揺るがしたのは、むしろピリッポスであった。彼はテッサリアやボキスといった後方の問題処理に一定の目的が立つと、諸部族が分立したままのオドリュサイ王国側の弱点をつき、武力を背景とした強引なやり方で東方へと進出したのである。

重要なことは、アテナイや周辺諸勢力などに対して攻撃的であると考えられてきたケルソブレプレテスが、実際には従来

⑤⑤ Athen. IV. 131 ではアテナイ人イビクラテスとコテュスの娘との婚姻の宴を茶化しているが、コテュスから婿への豪華かつ大量の贈り物のことを述べている。ギリシア人の質素さに比べてバルバロイであるコテュスの裕福さと贅沢を好奇の目で書いているが、ギリシア人がコテュスをそれなりの実力者として見ていたことを示唆する。同じく Theopomp. fr. 21 には、あらゆるトラキア王の中で、コテュスが特に享楽と贅沢に熱心であったこと、彼の富強ぶりは人々の羨望的であったという。

考えられてきた以上に穩健な政策をとっていることである。コテュス以来相次ぐアテナイとの対外戦争や内戦により、オドリュサイ王国は相應に疲弊していたはずである。彼にとってみれば、経済的にも周辺ギリシア人との関係は不可分なものがあり、無暗に戦争を起こすよりも、当面は国力回復を優先させることが現実的な政策であった。そのためには、最大勢力のアテナイとは協調的な関係を維持する必要があったのであろう。同様のことはアテナイにも当てはまる。アテナイは前三五〇年代初頭の同盟市戦争において大きな打撃を受けており、経済的に疲弊していた。相対的にケルソブレプテスのオドリュサイ諸王に対して優位にあるとはいえ、こちらでも不用意な争いは避けねばならなかった。何より、ケルソネソスを確保してヘレスポントス情勢を安定させることは、輸入穀物確保のためにも重要な政策であった。そのため、アテナイにとってもケルソブレプテスは、ケルソネソスやエーゲ海北岸の安定に一定の貢献をすることを期待されていたのであろう。トラキアの地はギリシア人にとり、豊かな鉱物資源など魅力ある土地であり、特にアテナイ人にとっては黒海方面からの穀物輸送路を扼する戦略的に重要な場所であった。今日出土する古銭の分析からも、オドリュサイ王国にはギリシア系商人が入り込んでおり、このことは、同王国がエーゲ海北岸を中心とする商業ネットワークの一部であったと位置づけられように思われる。こうした観点からの分析は、本稿では十分にできなかったので、今後の課題としておきたい。

トラキア史研究は通常ギリシア人のトラキア進出という観点から考察され、トラキア人はどちらかと言えば受け身の存在で、進んだギリシア人の文物を吸収する存在とされている。しかし、ギリシア人ないしアテナイ人はトラキアの沿岸部にクレルコイなどを設置するのがせいぜいで、トラキア人を実効支配することは出来なかった。トラキア人は縦深ある国土と峻険な山岳地帯に依り、容易にギリシア人の思う通りにはならなかった。トラキア人はこうしたギリシア人の限界を見透かすかのように、自らの要求がある程度ギリシア人に突きつけることも可能であった。ケルソブレプテスらはアテナイ人に沿岸部で貢納をとる権利を認めさせ、援軍を出させることもあった。また、複雑な彼らの利害調整の調停役にアテナイ人を引き込み、王国体制の維持に利用したという側面もあるのではなからうか。即ち、ケルソブレプテスとアテナイ

の間に、一定の相互依存関係が見いだせるのである。本論では、トラキア史研究の中でも南東トラキア史の中核に位置するオドリュサイ王国の側面を明らかにした。トラキア史研究は史料に比較的恵まれる分野から順次研究が進展していき、史料の少ない分野がその恩恵を受けていくことになるであろう。史料の多いオドリュサイ王国研究が進展すれば、南西トラキアやゲタイ人など北方の他のトラキア勢力と比較対象として用いることが今後可能になり、その他のトラキア史研究の分野でも研究の進展が期待できるのではなからうか。

（広島商船高等専門学校一般教科教授）

The Politics and Military Affairs of the Odrysian Kingdom in Thrace in the Decade of 350 BCE, Focusing on Trends of King Cersobleptes of the Eastern Kingdom

by

OGOU Hiroshi

The Thracian Odrysian Kingdom, a major power in the northern Aegean coastal region, split into three kingdoms in 360/359 BCE with the death of its King, Cotys. The western part was ruled by Berisades, the central part by Amadocus, and the eastern part by Cersobleptes, son of Cotys. Traditionally, the ancient Thracian world was perceived to be little more than an illiterate, uncivilized world, being relatively isolated and having only limited contact with the Greek world. In general, Greek sources stereotypically portrayed the Thracians as a warlike people practicing raiding as a livelihood. Because of this, the Odrysian kings were often perceived to be warlike as well, despite influencing the Greek world to no small amount. However, recent advances in the field of Thracian studies, especially that of archaeology, have been great, revealing the close contact that existed between the Thracian world and the Greek world. The Thracian world is now being thoroughly reevaluated, and it is now considered an important factor in the reevaluation of the ancient eastern Mediterranean world's development.

Within this context, the Odrysian kingdom, the only power to unify southeastern Thrace from 5th to 4th century BCE, occupies an extremely important position in analyzing the relationship between Thrace and the Greek world. However, some of the Odrysian kings are still seen as aggressive invaders. This is especially true of King Cotys, preeminent in his power during the 4th century BCE, along with his son Cersobleptes. This is due to their portrayals in Greek sources as being unlawful aggressors. The Odrysian kingdom occupies an important position in the field of Thracian studies, and a major reevaluation is now required. This paper especially focuses on Cersobleptes' political and military actions in the 350s BCE.

Greek sources from 350s BCE depicted Cersobleptes as an untrustworthy

barbarian when appraising his character. Because of this, many historians have hitherto regarded him as an aggressive and uncivilized king, who attempted to reunify the Odrysian kingdom while shuttling between Philip II of Macedon and Athens. One historian also asserted that while he never destroyed his friendly relationship with Athens, he nonetheless pursued aggressive policies in order to reunify the divided Odrysian kingdom. Such traditional views portrayed Cersobleptes as an aggressive and wily king who attempted to reunify the Odrysian kingdom in some form. In particular, Cersobleptes allied himself with Phillip II of Macedon and attempted to seize from Athens the Thracian Chersonesus peninsula, which was located in a crucial area of the contemporary grain transport route from the Black Sea to Athens. He also acted aggressively towards other Odrysian kings west of the central area and neighboring Poleis such as Byzantion. Yet, in many cases, Cersobleptes' portrayal as an untrustworthy barbarian, alongside that of his advisor the Greek mercenary captain Charidemus, was made in the political orations of Demosthenes. So far, criticism of these sources has been unsatisfactory, despite the fact they were politically motivated. By utilizing various literary and archaeological sources, this paper argues that Cersobleptes never attempted to reunify the Odrysian kingdom in 350s BCE. Cersobleptes did attempt to oppose the eastward advance of Phillip II by utilizing Athenian power, which desired stability in Thrace, but he did not pursue any aggressive policy in particular. In a sense, he used Athens in order to maintain his kingdom. The Odrysian kingdom had experienced civil war during the reign of Cotys, followed by a protracted war between Cotys' reunified kingdom and Athens. The split of the kingdom caused by Cotys' assassination culminated in the confrontations among the three Odrysian kings who attempted to rebuild their relations with Athens. Cersobleptes had in fact placed a halt to unnecessary military actions at the time in order to rebuild his exhausted and war-weary kingdom, while effectively utilizing Athenian power to his own advantage.

Key Words; Thrace, Odrysian Kingdom, Cotys, Cersobleptes